

高砂丹前

長唄 全詞章

本名題「女夫松高砂丹前」

丹前物

資料の題名『女夫松高砂丹前』

いまを始の旅衣、今を始の旅衣、日も行末ぞ久しき

〔二上り〕 高砂や木の下陰に尉と姨、松諸共に我見ても、久しくなりぬ住吉の、此の浦舟に
うちの手つきもろとも 月諸共に大潮や、是は目出度き世の例

おいきすがたひき 老木の姿引かへて、妹背わりなき女夫松、葉色は同じ深緑、見れども思の尽きせぬは、
真なりけり恋衣

げ 実に恋は曲者、仮令万里は隔つとも、慕ふ心はそりやいはんすな、朝な夕なに空吹く風も、
おちばごろも 落葉衣の袖引まどふ、思ふ殿御はつれなの身にし、時に残る仇枕

みごと さても見事になア、振つて振り込む花槍は、雪かあらぬかちらちらと白鳥毛、
ふれさどつこいふれさどつこい、袖はひらひら台傘 堅傘 恋風に靡かんせ、ずんと
の 伸ばしてしやんと受たる柳腰、しなやりふりやり流目は、可愛らしきの宿入

〔三下り〕 松の名所はさまぎまに、あれ三保の松羽衣の、松にかけたる尾上の鐘よ、あひに
あひおひめをとまつ 相生夫婦松、中に緑のいとしらしさの姫小松、二かい三かい五葉の松、いく代重ねん
ちよみぐさ 千代見草、しほしほらしや

にしうみあをき 西の海青木ヶ原の波間より、現れ出し神松に、降りつむ雪のあさかんかた、玉藻かるなる
きしかげ 岸影の

〔ウタイ〕 松根に依てこしをすれば

せんねん 千年の緑手に満てり、指す腕には悪魔を払ひ、納むる手には寿福を抱き、いり来るいり来る
はな 花の顔見世、貴賤の袂袖を連ね、さつさつの声を楽しむいさぎよや